

2018年度・第1回フィールドサイエンス・コロキウム

日時：2018年9月21日（金）15:00～18:00

題目：『環境変化とインダス文明』プロジェクトから

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・306号室

主催：東京外国語大学AA研フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

報告書：

本報告では、総合地球環境学研究所で実施された「環境変化とインダス文明」プロジェクト（研究代表者・長田俊樹、期間2007-2012）について、そのプロジェクトが企画される経緯や文理融合プロジェクトとしての特徴、地球研での審査過程やその評価など、6年間のプロジェクトの成果についての報告とその多角的な検証がなされた。

「環境変化とインダス文明」プロジェクトは、古代インダス文明（紀元前2600年～1900年）を事例にとりあげ、洪水や海水準変動などの環境変動が海上交通などの文明の地域ネットワークに与えた影響などを検証することで、文明が衰退した原因を明らかにしようとする学際的な共同研究プロジェクトである。

第一の報告者である長田俊樹先生は、このプロジェクトの代表者であり、また、南アジアの言語学を専門としており、総合地球環境学研究所でのプロジェクトの採択やプロジェクト実施の過程、その後の評価などを含めて、総括的な報告を行った。

特に、学際的な観点から、インダス文明の盛衰と環境変化との関りを検証する本プロジェクトのねらいや特徴的な手法、また、古代文明の歴史という考古学的分野に関わる研究課題への理科系の研究者による評価の難しさの問題などについて、多角的な議論がなされた。

第二の報告者である前杵英明先生は、自然地理学の立場から本プロジェクトに参加した経験を踏まえて、特にヴェーダ文献に言及されるサラスワティー川について、地質学的手法を用いてその歴史的な流路変化の測定を行い、インダス文明の盛衰と環境変化との関係を実証的に検証した経緯を報告した。また、これまで計測されたことのなかった、ネパールのララ湖の最も深部の湖底での地質調査を行い、インダス文明の盛衰に関わる気候変動を実証的に検証した経緯が報告された。

これらの議論を通して本プロジェクトが、自然地理学などの理科系研究者の手法を生かしながら、人文学系の分野であるインドの文献学的研究や考古学的研究との共通した研究課題を掲げることで、緊密な共同研究会を組織し、文理融合のすぐれた成果をあげてゆく経緯が指摘された。

全体討論では、以上の報告について様々な観点から議論が行われた。

特に本プロジェクトが、日本隊としてインダス文明遺跡の発掘をはじめとおこない、河床の年代測定法によってヴェーダ文献のサラスヴァティー川の流路変更を検証し、河川環境の変化がインダス文明の盛衰に与えた影響を明らかにするなど、文理融合プロジェクトの手法を生かした共同研究会の特徴が指摘された。

最終的に、英語の刊行物をインドから12冊、ハーバード大学から2冊を出版し、総合地球環境学研究所でのプロジェクトの最終審査でも最高の評価を得るなど、文理融合型共同研究としての、インダス文明プロジェクトの多様な成果が検証された。